

共に学ぶ教室を目指して

～ 子どもたちの互恵的な相互作用の展開 ～

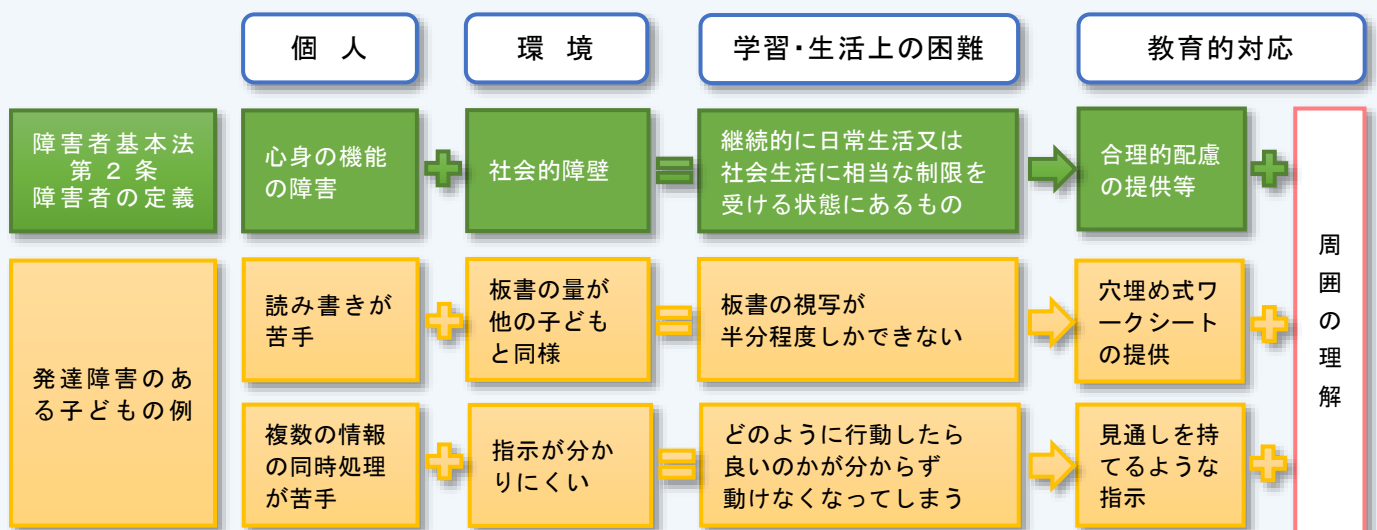
相互支援関係の構築

障害の有無に関わらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、地域社会の一員として、自立し社会参加しながら生きていくことができる「共生社会」の実現を目指し、様々な取組が求められています。



「共生社会」の実現のためには、誰もが、周囲の人々と相互に支え合う関係を構築することが大切です。学校においては、各教科、総合的な学習の時間、特別活動など、教育活動全体を通して、一人一人の子どもが障害の有無に関わらず、自己と他者への理解を深めながら、相互支援関係を構築することができるよう、指導・支援を行っていくことが重要です。

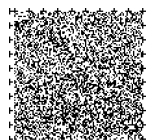
「障害のある子どもの学習・生活上の困難」と「教育的対応」



互恵的な相互作用

障害のある子どもの、学習上又は生活上の困難は、個人の特性と環境との相互作用の中で起きています。このため、その困難の軽減に向けては、ソーシャルスキルトレーニング等により個人の心身の機能を高めるだけでなく、その子どもが生活しやすい環境を整えることが必要であり、学校においては、合理的配慮の提供等に加え、周囲の理解を促していくことが大切です。

集団での学習や生活の中で、周囲の子どもたちが、障害のある子どもの気持ちや行動を理解し、うまくかかわれるようになると、障害のある子どもは、安心して学習や生活に取り組むことができるようになります。また、周囲の子どもたちも、障害のある子どもとかかわり合う中で、視点が広がったり思考が深まったりするなど、柔軟に他者を受け入れ、共に生きていく力を育むことができるようになります。



子どもが自己理解・他者理解を深めるために

子どもが自己理解・他者理解を深められるようにするためには、教師が一人一人の子どもを理解し、子どもを認めることが大切です。

そして、子どもが他者の多様な側面に触れ、自己と他者への理解を深められるよう、子ども同士の互恵的な相互作用を展開させていくことが大切です。



■ 一人一人の子どもを認める

教師は、一人一人の子どもと直接的にかかわる中で、その子どもの全体像を理解しようとすることが大切です。言動の背景を考えたり、子ども同士のかかわり合いの様子を見守ったりすることで、一人一人の子どもの豊かな世界が見えてきます。

子どもは、教師が自分のありのままを理解し、認めてくれることで、自分の苦手な部分にも向き合うことができるようになり、自己への理解を深めていくことができます。



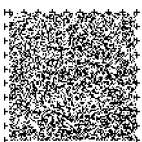
集団での生活が苦手で学校行事にうまく参加できない子どもに対し、教師は、戸惑う気持ちに寄り添い、うまくいなくても大丈夫であることを伝えながら、一緒に迷ったり悩んだりしていくことが大切です。

■ 子ども同士の関係をつなぐ

教師は、子どもに、他の子どもの言動の背景にある思いに気付かせるようにしたり、子どもの発言を集団の中で肯定的に位置付けるようにしたりすることが大切です。子どもは、他者の多様な側面に触れ、自分に置き換えたり、比較したりすることで、自己への理解とともに他者への理解を深めていきます。

そうして、お互いを認め合う関係性が育つことにより、子どもは、より一層、他の子どもに自分の思いを伝えたり、他の子どもからの支援を受け入れたりすることができるようになっていきます。

教師は、子どもたちの異なる見方、考え方を、「〇〇さんはこんなふうに考えていたんだね。先生も気付かなかったな」「この考えって他の人とは少し違っていて、新しいね。なんだか面白いね」と肯定的に位置付け、周りに伝えることが大切です。



栃木県教育委員会事務局特別支援教育室

〒320-8501 宇都宮市塙田 1 丁目 1-20

TEL 028-623-3381

URL <http://www.pref.tochigi.lg.jp/m05>

<発行：平成 30 年 3 月>